

提言書

平成 23 年 4 月 9 日

農林水産大臣 鹿野 道彦 殿

飯舘村長 菅野 典雄

1、飯舘村について

飯舘村は、阿武隈山系北部の高原に開けた自然豊かな山紫水明、風光明媚の美しい村である。本村の農業の主要作物は、水稲・畜産・葉たばこであり、複合経営の柱である畜産分野では「飯舘牛」のブランド化を推進し、園芸分野では高冷地の条件を活かした、きゅうり、インゲン、トルコギキョウ、リンドウ等のブランド化を推進して来た。

さらに、本村の総合振興計画において、人と人が「お互いさま」の心を持って接しあう飯舘流スローライフ「までいライフ」を推進し、昭和 62 年の自治大臣表彰を初めとして、平成 3 年国土庁長官表彰、平成 9 年農林水産大臣表彰、平成 17 年総務大臣賞、平成 20 年厚生労働大臣表彰、平成 21 年農林水産大臣賞など、本村の活動を賞する全国表彰を受賞してきた歴史がある。

2、福島第一原子力発電所の事故による本村の被害について

本村は、原子力安全委員会の防災指針に示された重点地域の基準(原子力発電所から半径 8～10km)を大きく超える 28km～47km に位置しながら、平成 23 年 3 月 12 日以来の福島第一原子力発電所の度重なる水素爆発事故による放射性物質の降下をきっかけとして、諸々・多大なる被害を蒙っている。

すなわち、目に見えない放射能による被曝リスクの増大と村民の精神的苦痛は言うまでもなく、これまで国を初めとする様々な機関が調査した情報が、本村に対する事前の報告・相談なしに一方的に公表されるとともに、単に「数値が高い」ことのみを強調・報道され、これまでの村の活動とは全く逆の立場で「世界の飯舘村」になってしまったことによる村民の不安と心労は計り知れないものであり、この風評被害が将来に渡って甚大なものとなることは、本村が最も憂慮する事態である。

3、本村は反核の旗手になるつもりはない

本村は、避難指示区域のはるか外にありながら、気象・地形の影響により、現時点で最大の放射能汚染被災地となっているが、本村はこの事故のみをきっかけとして「反核の旗手」になるつもりはない。

むしろ飯舘村が、原子力事故における放射能汚染被災地の範となって、復旧・復興を果たすことこそが、福島県を初めとする東北地方、さらには日本にとっての最大の利益となり、もって世界の範となるものと考ええる。

4、世界の範となる復旧復興の村へ

世界の範となる復旧・復興を果たすためには、国がこの村を放射能から蘇らせるモデルケースの村として提起し、産・官・学が一体となって前例のない施策を積極的かつ迅速に実施して農村としての早期再興を果たしていくことが必要であり、この取り組みが今後の日本政府にとってのプラスにつながるものと考ええる。

そのためには、国を挙げて英知を結集してセシウム 137 などの半減期の長い放射性物質の他、原発事故により飛来した全ての放射性物質の水、土壌からの完全除去を実現することが急務であり、この実績が各地の原発立地地域の今後のあり方に関する大きな指標となるものと考ええる。

5、復旧・復興に係る今後の支援について

6,000 人あまりの全ての飯舘村民は、今回の原発事故により直接的な被曝被害を蒙るとともに、風評被害による経済的打撃を受けて、日に日に疲弊の度を増しているが、原発事故が起こる前の生活を早く取り戻すことを切望しており、本村に生活基盤を置きつつ世界の範となる復旧・復興を果たすことを望んでいる。

そのために、国、原子力安全・保安院、原子力安全委員会はエリアに拘らず、土壌改善事業や、全ての村民に対する生活支援、避難者支援など、あらゆる支援策を早期に実施し、本村をモデル的復旧・復興事業の対象地として指定することを強く要請する。